国際関連情報 Report from IASB

マクロヘッジ・プロジェクトのスタッフとしての経験

ASBJ 専門研究員　山下（やました）　裕司（ゆうじ）

国際会計基準審議会（IASB）のマクロヘッジ・プロジェクトに、Visiting Fellow（客員研究員）として参加しています。スタッフとして受け入れられてから半年余りが経過し、最近では、案件のテクニカルな内容・経緯等にもかなり習熟し、IASB における仕事の進め方にも慣れてきました。

ただ、その分、要求事項というか、求められる貢献のレベルもかなり上がってきたように感じます。検討項目の大枠はプロジェクト開始時に決められているのですが、個々の案件の分析、スタッフとしての見方の提示など、スタッフ・ペーパーの内容の核心的な部分は任されるようになり、その分、同僚・上司から「この分析には大きな見落としがある」、「お前の view はここに矛盾がある」といった指摘が、容赦なく浴びせられるようになりました。理事会における理事方からの質問・コメントも、何やら厳しさを増してきたように感じます。

直近の 7 月理事会では、株式をあたかも固定金利債務のようにみなして公正価値ヘッジの対象にする Equity Model Book という考え方がトピックとなりました。株式と債務は、損失吸収力という観点から明確に峻別するという見方に深く馴染んできただけに、この考え方を初めて聞いた時には、かなり驚きました。しかも、前任者が離任したという事情から、自分が本トピックでペーパーを執筆し、プレゼンをしなければならないと分かった時には、愕然としました。しかし、スタッフとして受け入れられた以上は、当然ながら組織人として行動することが求められます。このため、ペーパーのトーン調整には、かなり気を遣いました。

しかし、この過程を通じて、会計というものの面白さを改めて感じたように思います。これまでの会計学の知識や実務上の経験から、Equity と Liabilities は明確に峻別するもの、Equity は Assets と Liabilities の Residual として定義されるもの、といった考え方を絶対普遍のものとして、受け入れてきました。しかし、実際には、株式には債務と同様の資金調達機能がありますし、企業によっては、株主に対して安定的な利益獲得や配当をターゲットとして示している場合もありますので、株式と債務には似た要素もあるわけです。もちろん、伝統的あるいは教科書的な見方は合理性があるからこそ、長きにわたって風雪に耐えているわけですが、どのような経済事象であっても、唯一絶対的な view というのはあり得ないはずです。会計は、様々な側面のある経済事象を、枚数の限られた財務諸表で表現しようとしているのですから、どのような扱いがよいのかは相対的な問題でしかなく、唯一の正解があるわけではありません。Equity Model Book に関する検討は、この

ような柔軟な見方の重要性を教えてくれたように思います。「ユーザーにとって意味のある情報とは何か」というのを一から考えるプロセスは、非常に面白いものと感じた次第です。

とはいえ、面白がってばかりはいられません。マクロヘッジ会計は、IAS 第 39 号置き換えプロジェクトの 1 つであり、金融商品会計の非常に重要なパーツの 1 つです。世界中のユーザーや作成者が、マクロヘッジ会計の完成を待ち望んでいます。まずは、金利リスクのヘッジに関する重要課題の検討完了を目標に、引き続き頑張って行きたいと思います。